

論述力

<総括>

試験時間	90	分	総解答字数	1000	字
------	----	---	-------	------	---

近代の経済・政治システムが抱える問題を「膜」と「核」という概念で論じ、さらに新しい情報技術がそれを克服する可能性に言及した課題文を読み、その内容を「膜」と「核」という概念を用いて要約した上で、現代政治上の弊害を新しい情報技術で克服するための解決策とその限界を述べることが求められている。

課題文の長さや（要約と論述を一つの文章で書くことを求める）設問の形式は従来通り。2022年度は論述において具体例を挙げることを明確に求めているが、今年度は明示されていないものの、当然、「現代政治上の弊害」や新しい情報技術を使った解決策についての具体例を挙げる必要がある。なお、法学部の小論文の問題では珍しく「解決策」を論じることが求められているが、限界も含めて検討する点が重要であり、最後に歯切れのよい解決策を書けばよいわけではない。

内容は、(ポスト) 近代論、情報社会論である。昨年（戦争と平和）、一昨年（文学と政治／個人と社会）と比べると、比較的オーソドックスで取り組みやすい内容になった。市場経済、国民国家、(代表制) 民主主義といった近代の社会原理＝理念型の意味・意義と、その現実社会との乖離をめぐる考察という基本的な頭の使い方がベースになるが、要約にしる論述にしる、それだけでは対応できない。複雑な世界を複雑なまま捉えられない人間の認知能力の限界と国境、責任、自由意志などの理念との関係、その限界（「膜」「核」の現象）、認知能力を桁違いに増大させるインターネットやコンピュータなどの新しい情報技術がそれを克服する可能性というポスト近代的な内容を受けとめることは難しかっただろう。特に新しい情報技術がどのように複雑な世界を複雑に捉えることを可能にするのかについては、著者はそのことを具体的に言及していないので、論述に際しては苦勞することになる。とはいえ、デジタル化、ネットワーク化を促進するITが「政治」に及ぼす影響は頻出テーマなので、きちんと社会科学系小論文の対策をしておけば対応できる。

なお、近年では半世紀（～1世紀）近く前の文章が課題文として使われ、当時の著者の視点、問題意識、予測を現代の具体的な場面に即して分析する、つまり歴史意識をもって現代を論じることを求めた問題が多く出題されてきたが、今年度の課題文は出版年が十年前と新しいものになった。しかし、近代システムとその原理、現代におけるその揺らぎと未来の可能性という問題意識が必要になるので、もちろん歴史意識をもって社会について考える姿勢が必要である。

<課題文の分析>

大問番号	
内容（主題）	近代の経済・政治システムの課題と新しい情報技術がそれを克服する可能性
出典（作者）	鈴木健『なめらかな社会とその敵』（勁草書房、2013年）
長短・難易等 前年比較	長短（短い・ やや短い ・変化なし・やや長い・長い） 難易（易化・ やや易化 ・変化なし・やや難化・難化）

<大問分析>

大問	出題形式	テーマ・課題文の内容	設問	設問形式	解答字数	コメント（設問内容・論述ポイントなど）
	課題文	学部系統的		要約	400字程度	文章の内容を「膜」と「核」という概念を用いて要約した上で、「膜」と「核」がもたらす現代政治上の弊害を新しい情報技術によって克服しようとする場合、どのような解決策があり得るかを、その限界も含めて述べる。
				論述	あわせて1000字以内	

※出題形式は「テーマ・課題文（英文を含む場合は付記する）・図表・その他」

※テーマ・課題文の内容は「一般教養的・学部系統的・教科論述的・その他」

※設問形式は「論述・要約・説明・分析・その他」

＜答案作成上のポイント・学習対策等＞

要約については、課題文に書かれた順番に論点を拾ってまとめてもかまわないが、1 ページ目に出てくるインターネットやコンピュータなどの新しい情報技術がもつ可能性という論点は、課題文の最後と合わせて後にまわすのが得策だろう。認知能力の限界から複雑な世界をある程度単純化して理解せざるを得ない人間が、国境や責任や自由意志などの概念を使った社会原理＝理念型を生み出してきたことをまずまとめ、それを後半の【膜】や【核】という現実社会の現象の課題と繋げて、さらにそれを経済・政治システムに即して説明したうえで、最後にその課題の克服に新しい情報技術が寄与する可能性に触れるとまとめやすい。

論述については、まずは「現代政治上の弊害」にあたる適切な具体例を挙げる。課題文では企業に着目して「経済システム上の弊害」にも言及しているが、ここでは「政治」に絞って論じることが求められていることに注意する。そして、筆者の言う「膜」と「核」という概念を使って弊害の意味を具体的に分析する。

課題文では、「膜」に関しては、国境が厳密になり、国民のメンバーシップが明確になることで、膜の内外で敵味方を明確に区別するあり方が引き起こす問題を指摘している。領土問題、安全保障問題、移民や難民の問題、貿易摩擦問題などが具体例の候補になる。また、「核」に関しては、国家の執行権力が自由意志を持つ国民（主権者）からの委任という社会契約を反故にして国民の意志に反する政治を行い、権力闘争に向かうという問題が指摘されている。日本について言うなら、投票率低下による代表制民主主義の形骸化、国会での審議の機能不全、バラマキ型の政策や周辺事態危機を煽るポピュリズム政治などを取り上げることができそうだ。アメリカのトランプ政権の登場以来、欧米諸国に広がるポピュリズム政治家の台頭を取り上げることもできるし、逆に中国のような権威主義的な政治体制を取り上げることもできる。

さらに、こうした問題に対して、インターネットやコンピュータなどの新しい情報技術が、その「膜」や「核」がもたらす現象・課題を克服する可能性について論じなければならない。「膜」についてはインターネットの情報、言説が国境を越えることで、特定の国の独裁的な政治や人権侵害の実態が明らかになる可能性を指摘してもよいし、「核」については、電子投票や国民・住民の意見を可視化するプラットフォームなどによって民意をより反映する可能性を指摘してもよい。肝心なのは、未だ実現していない（一部の場・地域でしか実現していない）新たな取り組みであること、その限界や危うさも指摘することである。

学習対策は以下の通り。

- ① 西洋近代の社会原理(人権、社会契約、民主主義、立憲主義など)の理解を深める。
- ② 現代社会が直面する法的・政治的問題に対して関心を持つ。
- ③ 第二次世界大戦後の日本と世界の歴史、特に冷戦期とポスト冷戦期の世界の変化とそれへの日本の対応について、ある程度の流れをつかんでおく。
- ④ 過去問演習を通じて、出題傾向をつかむとともに、抽象概念と具体的な現実との往還を通じた思考訓練を積む。